
令和8年度 第2回（午後）（グローバル・2科目共通）

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和8年2月2日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は24ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の——線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 幅広い読者ソウから人気はばのマンガだ。
- ② 新潟県にはコクソウ地帯がある。
- ③ 試合のケイセイが逆転する。
- ④ 校長先生のクンジを聞いた。
- ⑤ 祖父の趣味しゅみは、ハンガを制作することだ。
- ⑥ 私の兄は、メイロウな性格で人気者だ。
- ⑦ 京都には、多くの神社ブツカクがある。
- ⑧ 港には貨物のシュウセキ地がある。
- ⑨ 駅で署名活動をしている人を見た。
- ⑩ 私の弟は、背泳を練習している。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

自由とは、人間が、思ったように行動したり、好きなように考えたりできること、をいいます。

これは、人間の生まれつきの性質です。人間は、自由なものなのです。これが、生きていることのすばらしさだと言えます。

動物も、好きなように行動したり、何かを感じたりしているように見えますけれども、①実は動物の場合、あまり自由ではありません。『飛んで火に入るAの虫』、という言葉があります。虫は、光に向かって進むようにプログラムされていたりと、自分の身に危険であっても、それが判断できないで、火に向かって飛び込んでしまうのです。こういうのは、自由とは言えません。

好きなように考える、とはどういうことでしょうか。考えることの本質は、目の前のことから②左右されないことです。目の前のことから左右されない、目の前にあるのは別な状態について頭のなかにイメージをつくり、その分だけ行動の幅を広げることができる、ということなのです。

動物にはこの能力が、とぼしいのです。そこで動物は、反射や本能によって動きます。考える能力は、あるとしても、そんなに高くありません。イカとか、タコとか、鳥とか、それから哺乳類、イルカとか、サルとかのように、考えたり、数を理解したりできるとされる動物もいます。でも、人間とは比べものになりません。

さて、こういう能力を使って、人間は何をするかというと、取りあえず、生きていこうと考えます。

生きていくためにやらなければいけないのは、まず、食料を手に入れること。食料以外にも必要なものがあります。着物を着るなら、その材料。家を建てるなら、その材料。それから、ほかの人びとと協力するのなら、仲間づくり。そのためのコミュニケーションとか、することがたくさんあります。

そこで人間は、発見します。生きていくのは大変だ。

生きていくのが大変な理由は、まず、食べ物が入らない場合がある。水だって手に入らないかもしれません。それから、

仲間がいなくてもいいかもしれません。もっと困ったことに、ほかの仲間がいて、仲間じゃなくて、敵かもしれない。敵だったら、食べ物を見つけても、取られたりします。食べ物を取られるだけならまだいいけれど、自分がやられて、殺されることも考えなければなりません。そうになると、自由もないですね。じゃあ、そうならないように、どうしたらいいかを考えます。

そこで、自由を、もう一步進んで考えなければならぬことがわかります。

自由とは、単純に、何かが「できる」ことをいうのではありません。そうではなくて、その何かを「している」こと。その何かを「している」と、ほかのみんなが認めてくれていることをいいます。

ここは、大事なので、詳しく説明しましょう。

単純に、何かが「できる」。

これは、そういう運動能力があつて、そういうことを考えることができ、実行に移そうと思えば移せることをいいます。

誰かがリングを持っていて、向こうを向いている。そのリングをかつばらおう。リングを取られたと、その人が騒いだら、棍棒で殴りつけよう。考えてみれば、自分がやろうと思えば「できる」ことは、いっぱいあります。銀行強盗も。レストランで食いつい逃げも。ストーカーも。それらが全部できることが、自由なのでしょいか。

もしそれが自由だと考えると、どうなるかと言うと、ほかの人（相手）も同じように「できる」ことがいっぱいあるということです。私がリングを持っていたとして、よそ見をしているあいだにかつばらわれてしまいます。リングを取られたと、騒いだら、棍棒で殴られてしまいます。これも相手の自由、ということになります。

自分の自由を無制限に主張すると、相手も自分の自由を無制限に主張します。結果的に、自分の自由は、とても小さな範囲に狭められてしまいます。なぜかと言うと、私の自由の範囲と、相手の自由の範囲が、重なってしまうからです。その結果、起これるのは、混乱と無秩序とケンカです。これでは社会になりません。

社会は、混乱と無秩序とケンカをなくしているという点が、とても大事です。すべての人びとが平和に生きていくことを、保証するための仕組みなのです。

じゃあ、どうしたらいいでしょうか。

人びとの自由と自由のあいだに、③線を引きます。この線は、目で見えるものではないけれど、社会の中にはあるのです。どういう線かというところからここまでは私の自由の範囲だから、私とその範囲で行動しても、ほかの人はそれを認めてください。でも、この線の向こう側は、相手の人の自由の範囲ですから、そこには私は立ち入りません。すべての人びとが、自分の自由の範囲を認めてもらうのとひき換えに、相手の自由の範囲を承認するのです。④こうすると、自由は、はじめてほんとうの自由になります。

こうしてほかの人びとから認められた自由の範囲を、権利といいます。

権利を囲む見えない線は、決まりなんですけれど、最終的には法律になります。

この自由について学ぶのは、二歳とか、三歳とか、ごく小さいときです。

そのとき、周りのみんなから言われて、わかるようになるのは、まず、自分のもの／ひとのもの、の区別です。ひとのものを取ってはいけません。自分のものは、使ってもよろしい。

身の回りのすべてのものは、誰かのもんです。山とか川とか、遠くにあるものは、誰のものでもなかったりしますけれど、でも、手元にある、ちよつと便利なものはたいてい、誰かのもなんです。そうすると、ひとのものを手を出すときは、「ちよつと使ってもいい？」とか「貸して」とか、言わないとだめですね。こういうことを学んでいきます。これは、法律の、とても原始的なあり方ですけど、子どもはこれを学ぶんです。

モノに対する態度は、誰かのもの（つまり、所有）ということなんですけれど、それ以外に、どう行動すべきか、ということも自由に関係あります。

B、自分の体。自分の体は、自分で動かすのは自由です。ほかのひとの体をつねったり、叩いたり、怪我させたりしてはいけません。それは、暴力ですね。

それから子どもは、おとなしくしてなさい、と言われます。自由にしてはいけない状況、というのもあるのです。おとなの

人たちが真面目なことを話していたり、誰かが正式な話をしていたりするときには、黙^{だま}って聞いていなければいけない。歩き回^{すわ}ってもだめで、座^{すわ}っていないといけないわけです。それがすんだら、なにか話しても、歌を歌ってもかまいません。

状況によって、こういう制限があるということも、学びます。

制限と反対に、能力を高めるための学びもあります。

たとえば、釣り竿^{つりざお}と糸^{いと}と針^{はり}で、魚を釣るところを考えてみます。釣り竿と糸と針があつたとしても、使い方がわからなければ、魚を釣ることはできません。つまり、魚を手に入れる自由がありません。でも、糸を釣り竿にこうやってつないで、針をつけて、えさのミミズをこうやってつけて、そうしてこの辺に糸をたらしめて……というやり方を、よくできる人に教えてもらった場合に、魚が釣れるようになります。自分の自由の範囲が広がった、ことになります。

ものごとの秩序や法則に合致^{あてあ}したやり方で行動すると、思いどおりの結果になる可能性が高まります。⑤これが技術^{ぎじゆつ}の、本質^{ほんしつ}です。技術を身につけることは、自由の、ひとつの表れです。

C、子どもが学んだ人と人とのあいだの決まりが、家族を超^こえた社会のルールとなつて、明確な法律のかたちになっていきます。

法律によって囲^{かこ}まれ、守られ、保護された、私の自由の範囲を、権利というのでした。法律としての権利は、与^{あた}えられたら、簡単に奪^{うば}うことができません。権利を行使しないからといって、権利がなくなるものでもありません。

たとえば、私のものである、このリング。リングは手に持っていないと、自分のものではないのか。手を放したとたんに、別の誰かのものになってしまうのか。私のものであるリングが、法律によって権利としてそう認められているのであれば、置きっぱなしにしてあつても、私が見ていなくても、誰かが食べたりできません。それは私のものだからです。

見てなくてもいい。実際にコントロールしていなくてもいい。これが大事です。社会の決まりによって守られているということが、権利とか、所有とかいうことの基本なのです。

⑥権利も所有も、自由の手段^{しゅだん}です。所有しているモノは、どういふふうにしても、自分の自由です。

モノについてはしばらく話しました。⑦今度は、考えについてのべましょう。

人間はどんなことでも考えるし、どういうことを考えてもいいのですけれど、その考えは言葉にして、ほかの人に言わないと、実は自分でも何を考えているか、よくわかりません。

言葉にして、ほかの人に話すということは、考えを共有するということです。

あっちの川に魚がたくさんいるよ、とか、雲が出てきたからもうじき雨になるよ、とか。そういうふうな考えは、共有すると、みんなの利益になります。それを述べるのは、まったく自由でなければなりません。

でも、あの子は嘘つきだよ、とか、あんたのことなんか嫌いだよ、とか言うのは、すべての人に意味がある有益な情報というよりも、誰かにとつて好ましくなかったり言われたくなかったりする言葉です。そうすると、そういうことを発言すること自身がトラブルの種になります。何でも自由に話してもいい、のではないのです。

言葉には、正しい使い方、というものがありません。D、自由に話していいことと、話さないほうがいいことがあるのですね。これが言葉についての最初のルールです。正しくて、ほんとうのことだけれど、話しちゃいけないことというのもあります。それは「秘密」とか「ナイショ」とかいうものですね。

秘密とか、ナイショとかは、ある人びとの利益と、もっと広い範囲の人びとの利益とが、一致しない場合に生まれます。

さて、人間は、世の中や社会全体についても、いまあるそのままではなくて、と別なふうなほうがよいのに、みたいなことを考えます。そうした場合、それを言葉にして、みんなに訴えます。「皆さん、聞いてください。こう思うんですけれど。」こういうことをいつでも自由に、述べてよい。これが、発言の自由です。

発言の自由があるときに、思考の自由（考えること）の自由も生まれます。

この自由がどこまで保証されるかは、社会によって違います。いちばん有名なのは、古代ギリシャの、議会です。

その社会のおもだった人びとが集まって、われわれ（注1）ポリスはどうすべきか、などを話し合います。

議会は、その外の社会とは区別されています。議会のなかでは遠慮なく、なんでも自由に話してよろしい。「おまえは若者の

くせに生意気だ」とか、「おまえのお父さんは変な人間じゃないか」とか、言われません。発言の内容がよい考えかどうか、純粹じゆんにそれだけを、みんなが聞き取ろうとします。

こういう習慣があると、討論が成り立ちます。討論によって、よりよい考え方が生き残り、あんまりよくない考え方は言い負かされてしまいます。これが、ギリシヤ人が考えた、なかなかよい伝統です。古代ローマにもこれがありました。

うんとよい考えは、文字にして書いておこう、という習慣も生まれました。

文字の特徴は、一度書かれたら、変化しないということです。

口で言った言葉は消えてしまいます。口で言ったことを共有しようと思うと、伝言ゲームのように繰り返していかないと行けません。繰り返していくと、もともとどういふものだったかは、そのうち、わからなくなります。文字なら、そういう心配がありません。

文字で書かれた、ある人の考え方は、とても正確に、時間や空間を隔へだてた遠くの人びとに伝わります。大事なことであればあるほど、こういうふうに文字にしておいたほうがいいということになります。

何が大事なことかという点、ギリシヤ人は、哲学てつがくを大事にしました。モノは何で出来ているかとか、徹底的てつていに考えます。あと、数学も大事にしました。二等辺三角形の両底角は等しい、とかいうふうなことを文字で書いて、みんなに伝えました。

このようなかたちで、文字を書き記し、かなり正しそうなことを、多くの人に伝えます。これは、ものを考える自由にとって、とても根本的なことです。ちょうど釣り竿と糸と針を使うと魚が釣れるように、文字を使うと、ものを正しく考える可能性が飛躍ひやく的に高まるのです。

文字を書いたり、演説したりして、自分の考えを、みんなに伝えてよい自由。これを言論の自由といいます。

言論の自由は、多くの社会で、なかなか成立しませんでした。けれども、近代社会（われわれの社会）にとっては、その基礎きそになる大事な原則です。

私たちの社会は、法律をつくり、人びとの自由を確保するように出来ています。法律は、自由を制限するものではなくて、実

は、自由を保証するものです。

さて、どういう法律をつくればいいのかは、議会で相談して決めるんですけど、その議会ではとくに、言論の自由が保証されています。議員たちは、議会で、どういうことを議論してもよいのです。議論のなかみについて、こんな発言をしてはだめじゃないかと、責任を追及ついせきされないようになっています。

議会の外側には、言論の自由がないかというと、そうではありません。新聞や、雑誌や、テレビなどがあって、そこにはいろいろな人が、これはいい考えだと思うことを書いたり発表したりすることができます。そして、みんながそれを知ることができます。議会ではこういう法律を決めるといいのに、と考えることができます。

より正しい、より進んだ法律を持つ社会は、より自由な社会になります。だから、^⑧言論の自由が、人びとの自由を保証し、前進させる、いちばん根本的な自由になるのですね。

(注1) ポリス：古代ギリシヤ人の都市国家

はしづめだいでさろろう おもしろ
(橋爪大三郎『面白くて眠れなくなる社会学』より)

問1 文中の空らん に入ることばを漢字一文字で答えなさい。

問2 文中の空らん ・・ に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア B Ⅱつまり C Ⅱしかし D Ⅱたとえば

イ B Ⅱやはり C Ⅱつまり D Ⅱしかし

ウ B Ⅱしかし C Ⅱたとえば D Ⅱだからこそ

エ B Ⅱたとえば C Ⅱさて D Ⅱつまり

問3 ——線部①「実は動物の場合、あまり自由ではありません」とありますが、筆者の考えによれば、人間が自由であるのに対して、動物が自由でないのはなぜですか。人間とのちがいがわかるように五十文字以上六十文字以内でその理由を説明しなさい。句読点も字数にふくめます。

問4 ——線部②「左右されない」とは、どういう意味ですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。
ア 良くならない イ 悪くならない ウ 関心がない エ 影響えいきょうされない

問5 ——線部③「線を引きます」とありますが、なんのために線を引くのですか。その説明として正しくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の自由な範囲はんいと相手の自由な範囲が重ならないようにするため。
- イ 自分の自由な範囲を他の人の自由の範囲よりも大きくするため。
- ウ 自分の自由な範囲と相手の自由の範囲を互たがいに認め合うため。
- エ 自分の自由な範囲を他の人に自由に立ち入られないようにするため。

問6 ——線部④「こうすると、自由は、はじめてほんとうの自由になります」とありますが、筆者は「ほんとうの自由」とはどのようなのだと述べていますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 思うように行動したり考えたりできる範囲を自分だけでなく他者にも認めることによって得ることのできるもの。
イ たとえ他人に悪い影響あいたを与えたとしても、そのことに対する自分の責任を無かったこととしてくれるもの。
ウ 相手の立場や自分と相手との関係をふまえて、所有することと行動することの意味に変化を与えるもの。
エ 他者の期待や社会のルールに関係なく、常に自分が自分の意志に忠実に行動することを許してくれるもの。

問7 ——線部⑤「これが技術の、本質です」とありますが、ここでいう「技術」とはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア それを身につけることで他人のルールや社会の制約を考慮することなく、自分の思い通りに行動できるようにさせてくれるもの。

イ それを身につけることによって自動的に自由が手に入るようになる、人間が自分の思い通りに行動するための特権のようなもの。

ウ それを身につけることによって自分のやりたいことができるようになる、自分の思い通りに行動するための工夫や方法のようなもの。

エ それを身につけた人だけが自由を手に入れられるようになる、それを身につけた人の努力に対する報酬ほうしゅうのようなもの。

問8 ——線部⑥「権利も所有も、自由の手段です」とありますが、「権利」や「所有」と「自由」との関係について述べたものとして、本文の内容と合っているものには○を、合っていないものには×を、解答らんに記しなさい。

ア あるリンゴを私が食べてよいとしたら、それはそのリンゴを所有する権利が私に属する場合に限定され、私は私の所有していないリンゴを食べることはできない。

イ あるリンゴを食べることのできる権利は、私はそのリンゴを一時的に手放したり見失ったりしたとしても、そもそもそのリンゴを所有する権利が私に属する限り失われない。

ウ 私があるリンゴを所有しているならば、私はそのリンゴを食べてしまい、その存在を消してしまったとしても、私があるリンゴを所有する権利は消滅しょうめつしない。

エ 私の見ていないところでだれかが私のリンゴを食べたとしたら、リンゴをコントロールしきれなかったという過失によって、そのリンゴを所有する権利は失われる。

オ あるリンゴを私が食べてよいかどうかの判断は、そのリンゴを所有する権利が法律によって私以外の人物に認められている場合には、私が自由に下すわけにはいかない。

問9 ——線部⑦「今度は、考えについてのべましょう」とありますが、「考え」について筆者が述べている内容と最も合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア みんなの利益になる「考え」は言葉にして共有できる。もちろん、みんなの利益にならない「考え」も言葉にすれば共有できるが、それは言葉にしないほうがよいのであって、何でも自由に話してよいわけではない。

イ 人間はいろいろな「考え」を頭の中に持つ。もちろん、その「考え」は言葉にして他の人に伝えなくても、考えている本人にとっては明確な内容として意識されているのであって、他の人がわからなくてもよいのである。

ウ 「考え」を言葉にあらわせば、その内容を他者と共有することができる。その内容がどんなものであっても、共有すれば多くの人たちにとって利益になるから、「考え」を言葉にして共有する自由は常に守られなければならない。

エ 人間は「考え」によって人を傷つけてしまうことがある。ただし、「考え」が人を傷つけてしまうのはそれを言葉にした時だけなので、言葉にさえしなければ、どのような「考え」を持つのが、それは個人の自由である。

問10 ―線部⑧「言論の自由が、人びとの自由を保証し、前進させる、いちばん根本的な自由になるのですね」とありますが、

その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 言論の自由があれば、不正や不平等に声を上げることができるようになり、その結果として社会の秩序ちつじょを乱し、悪化させようとする人たちをきびしく取り締しまることができるようになるから。

イ 言論の自由があれば、自分の考えを言葉にすることによって、自分がこの社会にどう関わっているかを実感でき、生きがいを得ることができるようになるから。

ウ 言論の自由があれば、人々は活発に議論するようになり、その結果として多様な考え方が生まれ、複雑な人間関係を基盤きばんにした高度に発達した社会が形成されるようになるから。

エ 言論の自由があれば、いろいろな人が意見を述べて討論することができ、そこから生まれたより良い考えから、より進んだ法律を作ることができるようになるから。

問11 この文章を読んだ後、三人の生徒が次のような会話をしています。会話文中の空らん ・ ・ に入ることばの組み合わせとして最も適切なものをあとから選び、記号で答えなさい。

生徒1 「自由とわがままって、ちよつと似ているような気がするんだけど。」

生徒2 「違ちがうと思うよ。」

生徒3 「どんな点が違うのか、確認かくにんしてみようよ。」

生徒1 「自分の意志で行動するという点では同じだよね。」

生徒3 「そうだね。」

生徒2 「人は社会の中で生きているんだから、みんなが を通すことはできないよね。」

生徒1 「社会生活が成り立たなくなってしまうよね。」

生徒2 「他の人の意志も尊重しなくちゃいけないんじゃないかな。」

生徒3 「自分が意志を通したら、他の人に迷惑がかかるかどうかポイントだと思っただけ。」

生徒1 「それだけかな。自分の行動に 2 をもつことが大切なんじゃない。」

生徒2 「責任をもって行動するのが 3 なんじゃないかな。」

生徒3 「わがままは、自己中心とも言えるよね。他人に迷惑かけるし、責任もたないんだから。」

生徒1 「自由に行動して、さらに自分を高めていけるようにしたいよね。」

- | | | | |
|---|------|------|--------|
| ア | 1 意志 | 2 責任 | 3 わがまま |
| イ | 1 自己 | 2 自己 | 3 自由 |
| ウ | 1 自己 | 2 意志 | 3 わがまま |
| エ | 1 意志 | 2 責任 | 3 自由 |

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

志方^{しかたむぎ}麦^{やなぎがき}は柳垣^{やなぎがき}小学校の六年生である。来週転校することになっているが、そのことをまだクラスメイトに言い出せてはいない。本文は『柳垣秋祭り』で六年生の合唱の発表が終わった後の場面から始まる。

寛^{かんた}太^たが机から飛び降り、あたしはファイティングポーズをとる。丹下^{たんげ}先生が「もうもうもう、やめてちょうだい」と泣きそくな声をあげた。

「仲良^{なつよし}くしましよ、こんな日くらい」

「もう！ 寛^{かんた}太^たも麦^{むぎ}もやめて、迷惑^{めいわく}」

丹下先生よりも大きな声を張ったのは美冬^{みふゆ}で「先生、あいつら無視して進めてください」と言う。丹下先生は困った顔のままあたしたち三人を順繰^{じゆんぐ}りに見て、「え、えっと、じゃあ、まあ、今日はお疲れ様でした」と①ぎこちなく笑った。

「みんなほんとうにお疲れ様。頑張^{がんば}ったね」

丹下先生が教室内の児童たちを見回す。見回すほどでもないけど。何しろ、このクラスの児童はたったの六人だ。あたしたちの通う柳垣小学校の六年生は、全員で六人。全校児童は、二十四人。こんなに少ないもんだから、柳垣小学校は来年春には廃校になることが決まっている。そして今日は、廃校^{はいこう}前の最後のイベント『柳垣秋祭り』が行われているのだった。最後だからってことで、町を挙げてのイベントになっていて、校庭ではいま外部のお客^{きやく}さんたちが飛び込み漫才^{まんざい}なんかをやっているはずだ。窓の外から喧^{やかま}しい声が絶えず響^{ひび}いてくる。さっきのあたしたちの発表も、これまで見たことないくらいの観客^{くわんかく}がいた。「最初^{さいしょ}はうまくまとまらなくてどうなることかと思っただけど、練習^{れんしゆ}を重ねたかがありました。今日はいままでで一番、綺麗^{きれい}に声が重なってたんじゃありませんか。えーと、その、ご覧^{ごらん}になっていかがでしたか、香坂^{こうさか}先生」

丹下先生が廊下^{ろうか}に目を向ける。骨から細い感じの男のひと——発表前に大人たちが『すごい有名人が来たよ』と連れてきた

ひとだ。東京で活躍かつやくしている、すごい作家の先生らしい。あたしは知らないけれど、美冬は『あのドラマの作者ね』と言っていたから有名なほんぼうのだろう。

「とても自由奔放なステージでしたね」

香坂さんは、やさしい声で言った。

「柳垣小学校らしい、おおらかさが出ていると思いました」

柳垣小学校らしい、つてなんだ？ ていうか自由奔放ほんぼうつて褒め言葉？ 首を傾かしげていると、②丹下先生が恥はずかしそうに俯うつむいた。

寛太が「もういいー？」と大きな声を上げた。

「おれたち、かなた中の奴やつらと一緒に遊ぶ予定いっしょなんだわ。多分、もう待っていると思う。だからさあ、そろそろ話、切り上げてくれる？」

「何言こうむちつてるの、幸村くん。こういうのはちゃんとケジメとして話をしましょう。それに、自由時間の予定まで、まだ五分もあるのよ」

「ハア？ そのたった五分が、おれらには大事なんじゃない。つーか、ケジメで何の話すんの？ 大変だったアタシの話？ そちの偉い先生の話？ そういうの、大人たちだけでやってよ」

「ちよつと、寛太、うるさい！ 黙だまって」

「うるせえクソブス！」

注意した美冬を寛太が怒鳴どなり、美冬が「はあ！」と立ち上がる。

「あんたが黙るべきでしょ！ ばかばか黙だまっててよ。いっつも『ブス』しか言えないばか。偉えらそうにしたいなら、もっと語彙ごい増やしてみな！」

「はー？ がり勉クソブスが！」

「はん、それくらいで増やしたつもり？ 知能、猿以下だね」

「ちよつとちよつと、止めて。止めましょ、みんな」

「うるせー！ せんせーがそもそも悪いんやんか。はよ終われつて！」

駄々っ子のように机をバンバン叩いた寛太が「浩志もそう思うよね？」と隣の席の浩志に訊く。これまで偉そうに腕組みをしていた浩志が「おう」と頷いた。

「せんせ、おれらに迷惑かけんで、はよ終わらせてよ。空気読んでよ」

「空気読んで、って先生の話も大事でしょ」

「大事じゃねえけど？」

浩志がかっこつけて言い、寛太が追隨するように「ねえしー！」と叫んだ。それから浩志は「お客さんの先生も、もういい？ おれたちの時間も大事なんだよね」と香坂さんを見た。

怒るだらうな、と思った。普通の大人なら、絶対怒る。でも香坂さんはとても面白そうに浩志を見て「君は、鈴原悟志さんの子どもだね？ よく似てる」と言った。

「悟兄はルールを守らない子は嫌いだと思うけど、それで大丈夫？」

え！と浩志が立ち上がった。

「え、え、パパの知り合いだったの？」

「ぼくは五年生までこの学校に通ってたんだよ。君のパパも、ママも知ってる。それで、もう一度訊くけど、君のさっきの態度は、大丈夫かな？」

笑いを含んだ声で訊かれて、浩志の顔が真っ赤になった。大人しく椅子に座る。それを見た寛太も下を向いた。
「丹下先生。お話の続き、どうぞ」

にこりと笑った香坂さんに、丹下先生は「ありがとうございます」と顔を赤くした。それからコホンと咳払いをして、「ええと、では、自由時間も迫せまることですし、簡単にすませましようね。十七時にいつものようにドヴォルザークが鳴ったら、校庭で閉会式が行われます。在校生は赤いカラーコーンの前に並んでください。閉会式後は、大人は校庭、子どもたちは体育館の清掃せいそうとなっています。校内の清掃は、代休があけた火曜日に行います」

いつもうるさいふたりが大人しいと、話がスムーズに進む。黒板に火曜日の時間割と持つてくるものを書いた丹下先生が「では」とあたしたちを見回す。

「それぞれ、連絡帳れんらくちょうに写してね。火曜日、忘れ物には気を付けて。ではみなさん、お祭りを楽しんでくださいね。解散！」
丹下先生がパン！と両手を叩くと寛太が「なげえー！」と叫んで立ち上がった。次いで浩志が「行こうぜ」と立ち上がる。ふたりは「一番乗りイエー！」と叫びながら教室を飛び出した。さっきまでほんとうに空気同然だった祐樹ゆうきと碧あおがのっそり立ち上がり、連れ立って出ていく。

「ほんと、ばかばかか」

あたしの前の席の美冬がふたりの背中を見送り、教壇きょうだんを見てはつきりとしたため息を吐はいた。振り返り「書き写した？ 行こっか」とあたしを誘さそう。

「あ、うん。もう少し待って」

ノートに書き写しながら、廊下を見る。いつの間にか香坂さんはいなくなっていた。

「あのひと、浩志のお父さんの知り合いなんだね」

「私、すごく驚おどろいた。＼シーツのほころび＼って、すごくいいドラマだったんだよ。あの作者がこの町出身だなんて知らなかったな」

いつもは冷静な美冬が、どこか興奮していた。

「しかも、わりとかつこよかったよね。丹下先生なんてトキメキ女子の顔してたよ」

美冬が鼻で笑い、教壇にちらりと目を向ける。丹下先生は、教壇のパイプ椅子に座って日誌を書いているようだった。

「ま、ときめく暇があったら、④現実見ろって感じだけど」

あたしは書き終わったノートをバッグに入れた。

「じゃあ、先生行ってきます」

いちおう丹下先生に声をかけて、あたしたちは教室を出た。

「私、あの一と大っ嫌い」

不機嫌垂れ流しで、美冬が言った。

「たった六人しか児童がいないのに、纏められないなんてどうかしとるやろ」

「ほんと、そうだよね」

丹下先生は二十三歳で、今年からあたしたちの担任になった。ニコニコしていて、やさしそうで、可愛くて、だから最初はあたしたちはちよつと年上のお姉さんが現れたようで嬉しかった。全員、そうだったと思う。

でも、夏休みが明けたころから、変わった。突然、浩志と寛太が丹下先生に歯向かうようになったのだ。ふたりは丹下先生を馬鹿にするような態度を始終とり、授業も真面目に受けない。そして、優しいだけの丹下先生は、それをうまく叱ることができない。困った顔をしているか、時々涙を流して見せるだけ。泣けば、浩志たちはますます調子に乗るって分かりそうなのなのに。

あたしや美冬は、他の先生たちや親にそれを言った。寛太たちだけではなく、先生を含む三人をどうにかしてとお願いした。でも驚いたことに、誰もがまともに取り合ってくれなかった。保健室の先生は『反抗期がきちやったのかしらねえ』と聞き流したし、校長先生は『丹下先生はまだまだ経験が浅いだけだよ。これからこれから』と笑い飛ばした。うちのおばあちゃんも『先生はどんなひとでも敬わにやいかん』と見当違いのことしか言わず、美冬のお母さんは『いまならまだ男女差なんて

ないも同然なんだから、ガツンと殴なぐっちゃいな』とけしかけてきただけ。そして事態を一番理解しているであろう丹下先生本人が『先生、もっと頑張るね!』と言ってしまった。

『たった六人。たった六人だからコントロールできると思い込んでるんだよ、大人たちは』

そう言った美冬は、大人たちに対して『希望』を失った、と続けた。私たちのこのヘルプは大人たちにとっては小さな問題なのかもしれない。実際、どうにかなることなのかもしれない。でもね、これはいつか、でっかい問題にまで育つよ。絶対。そのとき初めて、あのひとたちはどこでどうすればよかったのかって愕然がくぜんとするんだ。

あたしは、それはさすがに少し大げさすぎやしないかなと聞いていたけれど、でも丹下先生がだんだんとかからの線を細くしているのを見て、それに気付きもしない大人たちを見て、美冬の言うことが正解なのかもしれないと思うようになった。だって、ゆっくり、間違はなく悪化してる。これから、とんでもなく悪いことが起きてしまうかもしれない。

あ。でも、あたしはここから出ていくんだった。

校庭に出て、出店や人ごみの中に飛び込んでいく。いつもは閑散かんさんとしている学校が、どこもかしこも賑にぎわっている。いつもは一輪車やドッジボールをしている校庭に、ひとが⑤ひしめいている。知らないひとたちが、あたしたちの場所を平然と歩き回っている。

まるで、双子ふたごの世界に来たみたいだ。似ているけど、違う。そんな世界に。そんな風に目の前の景色を眺ながめると、あたしの少し先を歩く美冬が「何か、⑥偽物の世界みたいだね」と振り返って言った。

「嘘うそみたい。この学校がこんなに輝かがやく日って、これまでであつたんかな？」
「ないと思う」

胸の辺りで、さわさわと嫌いやな感じがした。ああ、ほんとうに嘘うそみたいだ。この現実の光景も、あたしが、この場所からいなくなるって事実も。昨日まではただのお祭りだったはずなのに、楽しみだったはずなのに、いまはあたしのお見送り会みたいに感じて、そして怖こわい。これからの想像すると、⑦足元がぐらぐらするような錯覚さくかくを覚える。

「やあやあ！ どうも、奥さん！」 近くで怒鳴るような声がして、びっくりとする。あたしの脇をすり抜けて歩いて行ったのは、寛太のお父さんだった。なんととはなしに背中を見送ると、寛太のお父さんは先にいた浩志のお母さんに話しかけていた。がっはっは、と獣みたいな笑い声をあげる寛太のお父さんを前に、浩志のお母さんはいつも通りおっとりとおどろきで微笑んでいる。「知つとる？ 賢介が、鈴原土木に就職したんよ」

美冬がぼそりと言った。

「鈴原土木って、浩志のおじいちゃんの会社だよな？」

「そう」

賢介というのは寛太のお兄ちゃん、今年高校一年生になった。

「賢介さ、入学してすぐに学校の先生を殴って入院させちゃって、退学になったんだって。そんで行くところなくなって、浩志のおじいちゃんがおれが更生させてやるって言って雇ったんだよ」

驚いて美冬を見ると、「賢介、小学校のころからすぐキレよったでしょ？ 治ってないみたいね」

と肩を竦めて、それから「やけん、寛太は浩志にへこへこしとるってわけ」と付け足した。

「へこへこ……ああ……」

それで、なるほど、と思った。夏休み前くらいから、寛太と浩志がケンカしなくなったのだ。

前は、ふたりはしょっちゅう争っていた。どちらも譲ることをしなかったから、ときどきは叩いたり蹴ったりに発展していた。でも最近はなくなっていて、それは丹下先生という共通のターゲットを決めたからだとあたしは思っていた。

「寛太は浩志に気を使つとる。そんで、そのストレスで丹下先生に噛みついとるんよ」

「美冬、よく見とるねえ」

全然知らなかった。分からなかった。

美冬は大人っぽくて頭がいい。あたしなんかとは全然違うとは思っていたけれど、やっぱり断然賢いんだ。

「嫌でも目に付くだけ。気付きたくないことも、あるよ」
つまらなそうに美冬が言った。

(町田まちだそのこ『ドヴォルザークに染まるころ』より)

問1 ——線部①「ぎこちなく」、⑤「ひしめいている」、⑧「おっとりと」の意味として、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

①ぎこちなく

ア 気持ちが晴れず不愉快ふゆかいな様子

イ 動作や態度が不自然な様子

ウ 動作が素早すばやく、軽快な様子

エ 落ち着いていて、堂々とした様子

⑤ひしめいている

ア 多くの人が広い空間に集まっているさま

イ 多くの人が大声で話をしているさま

ウ 多くの人が整然と並んでいるさま

エ 多くの人がぎゅうぎゅうに集まっているさま

⑧おっとり

- ア ぼんやりしているさま
- イ おだやかで、落ち着いたさま
- ウ ひたすら何もしないさま
- エ 無口で、何も話さないさま

問2 ——線部②「丹下先生が恥はずかしそうに俯うつむいた」とありますが、この時の丹下先生について説明したものととして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア クラスの生徒の合唱を有名な作家の先生がほめてくれたので、うれしく思っている。
- イ 合唱がうまくいかなかったことを遠回しに指摘されて、いたたまれない気持ちになっている。
- ウ 有名な作家の先生の前でクラスの生徒が自由に歌えたことを、ほこらしく思っている。
- エ 合唱の内容を批判されるのではないかと心配だったが、そうではなかったことにほっとしている。

問3 ——線部③「浩志の顔が真っ赤になった」とありますが、このときの「浩志」の気持ちの説明として適切ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のしたことを恥はずかしく思っている。
- イ うまくやりきれなくて悔くやしく思っている。
- ウ よけいなことをしなければよかったと後悔こうかいしている。
- エ あまりに意外なことにおどろいている。
- オ 今後のことを考えて少し動揺どうようしている。

問4 ——線部④「現実見ろ」とありますが、ここという「現実」とはどのような「現実」のことですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。句読点も字数にふくめます。

問5 ——線部⑥「偽物の世界」とありますが、そのように言ったのはなぜですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちが抱かかえている大きな問題をかくして、お祭かいさいりを開催して楽しんでいることに疑問を感じたから。

イ 今日たくさんの人が集まっていることが、まるで自分のお見送り会のように感じて少し恐怖きょうふを感じたから。

ウ 自分たちのものである学校に、知らない人がたくさん来て動き回まわっていることに違和感いわかんがあったから。

エ 学校の楽しいイベントには来るが、普段ふだんは自分たちに対して無関心な地域の人に不快感があったから。

問6 ——線部⑦「足元がぐらぐらするような錯覚を覚える」とありますが、この時の表の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が転校してここからいなくなるという事実が急に切実に感じられ始めたが、一方でほんとうに転校することになるのか信じられないような気持ちにもなっている。

イ 周囲が急速に変わっていく中で自分がその変化に対応しきれず、学校の中に自分の居場所がなくなってしまうことに対していらだちを感じている。

ウ 楽しみだっただけのお祭りが自分のお見送り会のように思われはじめ、いよいよ自分がこの学校を去る時が近づいているという事実を受け入れようという気持ちになっている。

エ 小学校が廃校になるということが現実的に感じられはじめて、今までの日常が変化することについていけず、自分だけが取り残されるような不安と恐れを感じている。

問7 ―線部⑨「夏休み前くらいから、寛太と浩志がケンカしなくなったのだ」とありますが、そのようになった理由を三十字以上四十字以内でわかりやすく説明しなさい。句読点も字数に含めます。

問8 本文から読み取れるA「美冬」・B「浩志」の説明として、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 正義感にあふれていて、みんながもめている時に上手くまとめることができる。
- イ えらそうな態度をとる一方で、実は大人の顔色をうかがうようなところがある。
- ウ 大人が手を焼くほど口が悪くて、血の気が多いが、ストレスを抱えている。
- エ 小さい時からキレやすく、辛抱ができてすぐ手が出してしまう乱暴者である。
- オ 周囲を冷静に観察して現実を客観的にとらえることができる、頭の良さがある。
- カ 納得できないときは、幼なじみと殴り合いのけんかをすることも恐れない気の強さがある。

